



十津川村に林業6次産業化の発信拠点「KIRIDAS TOTSUKAWA」誕生 ～同村産木材を使った家具や小物の展示・販売を行うカフェ&ギャラリー～

■2011年の大水害を契機に林業再生を決意

十津川村は奈良県の最南端、紀伊半島のほぼ中央に位置し、村としては日本一の広さを誇る。面積は672.4km²（奈良県の約5分の1）で、そのうち96%を森林が占め、世界遺産の「熊野参詣道こへち」と「大峯奥駈道おおみねおくがけみち」が村内を通る。

1960年に約25万m³あった同村林業の素材（木材）生産量は、2010年には約3千m³にまで落ち込み、まさに風前の灯火だった。しかし2011年に村に甚大な被害をもたらした紀伊半島大水害を契機として、「山に寄り添い暮らす我々が山を守っていくことは『使命』であり『責任』である」と、村を挙げての本格的な林業再生に取り組み始めた。

■十津川式「林業6次産業化」の取組み

一般に木材の流通はとても複雑で、多くの流通段階を経ることで「山から木材が伐り出される現場」と「木材を利用する消費者」の距離が遠く、お互いが見えにくい関係になっている。

そこで十津川村では、林業が隆盛を誇った時代には消費者ニーズに合致した木材を供給する視点が欠けていたという反省も踏まえ、山づくりから製材、加工、販売までを村内で一貫して行う「林業6次産業化」を目標として掲げた。村内で仕上げた村産材を、流通を一切通さず提携先の近畿圏の工務店へ直接販売する「産直住宅」など、意欲的な取組みを数々手掛けている。

■2017年4月に「KIRIDAS TOTSUKAWA」誕生

そうした取組みの一環として、2017年4月、林業6次産業化の情報発信拠点となる村営施設「KIRIDAS TOTSUKAWA」がオープンした。建物は森林組合の旧製材所をリノベーションしたもので、名前は「木を伐り出す」に由来。村のスギやヒノキを使った家具や小物の展示販売を行うとともに、コーヒーやハーブティー等を提供する

カフェも併設し、村内外から気軽に人が立ち寄れるおしゃれな空間となっている。

KIRIDASに隣接する工房では、県外から移住してきた3名の若手家具職人が製品作りに精を出す。同村は2012年から、家具デザイナーの岩倉榮利氏えいりが監修する家具プロジェクトに取り組んでおり、「TOTSUKAWA LIVING」というブランド名で無垢材を使用したシンプルな構造とフォルムを特長とする家具を製造販売。朴訥で硬派でありながら心安らぐ柔らかなデザインとなっており、販売額も毎年少しずつ伸びている。

■山村と都市が共生できる世界を目指して

KIRIDASの仕掛け人の1人で、林野庁から出向中の同村・近藤昭夫参事は、「山村が生き残るためには、都市部の消費活動に村の経済を接続することが必要。家具や小物という最終製品で都市部の消費者とつながることで、都市部のマネーの獲得と、なかなか目に見えにくい林業を都市部に対してわかりやすく身近に提示することも可能になるのでは」と指摘。

自由な多目的スペースとしてKIRIDASの様々な使い方を試行しながら、「山村と都市が共生できる世界を模索する入口のような役割を果たしたい」と今後の目標を語る。（吉村謙一）



旧製材所をリノベーションした「KIRIDAS TOTSUKAWA」の外観（左上）と内観（右上）。「TOTSUKAWA LIVING」のチェストと小物類（左）。